ゾンビとアイツ

スルメ・レモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゾンビとアイツ

【Ｎコード】
Ｎ９９９０Ｏ

【作者名】
スルメ・レモン

【あらすじ】
ある事件に巻き込まれた主人公がゾンビになって、どんどん厄介な出来事が起こる。
そんなどこかで聞いたことのあるようなフレーズの化け物ファンタジー。

『境界線上のホライゾン』のアイテムなどの設定が仮でほんの少し使われています。

他に名案が浮かんだら直ちに変えますのでご了承のほどを。

モバゲーの作品を改変しております。

物語は始まる

真っ暗になった人気(ひとけ)の無い道に1人の淡(あわ)い紺色(こんいろ)の髪の長身の男がいた。男の丸太のような腕を見れば相当鍛え抜いてあることがわかる。

「人間は脆(もろ)いな」

否(いな)、正確にはもう1人いる。しかし、路上を真っ赤に染めて腹部(ふくぶ)に即死の穴を穿(うが)たれているモノが人と呼べるならばの話だが。

「俺など庇(かば)うからそうなるのだ」

男は哀れなものを見る目で見る。

そして男は「だが」、と笑った。

「人間にしてはなかなかに面白い奴だ」

そう言うと男は懐から青白く光る球体を取り出してそのモノに穿たれた穴に押し込んだ。

「お前は俺がバケモノにしてやる」

ソレを入れたモノに変化が起こった。

傷は塞(ふさ)がり、真っ青だった顔は肌色に戻った。

「だが忘れるな、ソレはお前次第で善にも悪にもなることを」

こうして、モノだった物体は不死身の化け物”ゾンビ”となったのだ。

そして物語は5年後の秋に移る。

金髪ロリは吸血鬼！？（前書き）

吸血鬼といえば、ネギま！のキティを思い出しますよね？

金髪ロリは吸血鬼！？

秋の少し肌寒い気温。
月明かりで本が読めそうなくらい明るい夜。
教師すらもいなくなった校舎にゾンビ、須川紘（すがわ・ひろ）はいた。
別に、なにか忘れ物をして校舎に残っているわけではない。
彼は日光はダメなんだ。なぜなら、ゾンビだから。
だが、別に死ぬわけではない。
ただ単に体全体の力が抜けるだけだ。
この日のように天気の時は出歩くことは出来ないが、悪天候のときや曇り空の時はぜんぜん平気。ゾンビとやらはよく分からない。

そして紘は校外に出るといつもの所に行った。
漫画などでもよくでるゾンビの楽園の墓場だ。
今宵（こよい）の月は清々（すがすが）しいほどの満月。
こんな日は温かい緑茶と団子で月見をしたいものだ。
そんな風に考えながら座り心地（ごこち）の良い墓石を探していると地面に花が咲いている。
紫色のとてもきれいな花だった。
紘は普段は花などに興味がわかないが、たまに見つけるのは良いものだと思う。
そして紘は珍しく、しゃがんで花を見た。

「おお、こんなとこにきれいな花が咲くんだ――」

「咲くんだな」の”な”が続かなかった。なぜなら紘の真上を何か

が通って隣の墓石を砕いたからだ。

「うっへぇ！？」

間抜けな声を出して横へ逃げる。

「ふん、よくぞかわしたもんだな人間」

そうのたまったのは偉そうな金髪でいかにも魔女が着そうな黒服と同じく黒いボロボロのマントを纏(まと)った女だった。
いやいや、さっきのはたまたまだから誉められても・・・・。
ってか偶然しゃがんでなかったらあの墓石みたいになっていたな。
しかし、よく見ると金髪魔女（仮）は西洋人の顔立ちをしていて小学生みたいな容姿をしている。
改名、金髪ロリ。

「おい、テメェ危うく死ぬところだったじゃねぇか！」

まあ、紘はゾンビだから死なないけどここはほら成り行きというかさ、まあいろいろ。

「おっと、そうだったな。気絶させるだけにしようと思ってたけどちょっと力(りき)んでしまった」

ふざけるなと叫びたくなる気持ちを紘はぐっと抑える。
そこで紘はあることに気づいた。
ん？まてよ、金髪ロリのあの力はもしかしなくても人間ではないな。
あの力は人間にしてはありえない強さだ。
紘はしばらく考える。
ふと、頭にあることが浮かんだ。

「もしかしてゾンビか？」

そんな事を思ったが違うとかぶりを振る。

「あのクソジジイが簡単にゾンビを作るはずがないな」

それに他の種族なのかもしれない。

だったらあいつは何者なんだと考えたが、何も思い浮かばない。

紘はとりあえず疑問の解消をしようと金髪ロリに話し掛けた。

「おい、金髪ロリ！テメェは何者だ！どう見たって人間じゃあねぇな」

「ろ、ロリだと・・・・？」

ギロリとこちらを睨む。おー怖い怖い。

「どうでも良いからどこぞのなに子ちゃんですか？」

ふんっと金髪ロリは薄気味悪い笑みを浮かべた。

「本来ならば下等な人間に教える事などないのだがな」

そこで人を小馬鹿にした笑みを浮かべる。

こんな危ない発言を素で言うやつは始めてみたと紘は変なところで感心した。

「だが、冥土の土産に教えてやろう」

なんだか偉そうに胸を張っているがちいさ・・・・げふんげふん。
控えめなので、そこはあまり関係ないが、はっきり言って凄みがないうえに台詞が思いっきりザコキャラである。

「よく聞け愚民よ、中世を絶望に陥れた吸血鬼にして最凶最悪の魔女エリス・セファンとはこの私のことだー！！」

どうだ参ったかみたいな言い方だった。
だが、しかしだ。

「誰だそれ？」

そう、そんな奴は見たことも聞いたこともない。ってか中世ってこれまた曖昧な・・・・。
それを聞いて金髪女ことエリスはガックシと肩を落とした。

「誰だだと貴様！侮辱する気か！」

だが、そんな名前の奴なんて知らないのだからしょうかない。
エリスは、紘の表情から真実だと知るとワナワナと肩を震わせた。

「よくも私を侮辱してくれたな。気が変わった、貴様はここで死ね！」

えらく短気な奴だとウンザリになる紘。
エリスはこちらに向けて構えをとる。そしたら映像が揺れるように身体がブレて一瞬で目の前から消えた！

「！？」

否、消えたわけではない。紘の反応速度を上回る速度でこちらに間合いを詰めてきたのだ。

「なに！？早すぎ－－－」

何かが刺さったのような音がする。

「ウグぅ」

呻(うめ)き声をあげるが状況がうまく把握(はあく)できない。

なんだか腹が焼けるように熱いのは辛うじてわかる。

ゆっくりと腹部を見るとエリスの腕が中ほどまで刺さっていた。

「グフッ、ゴフ」口から有り得ない程の血が吐き出される。

液体が地面に付着する湿っぽい音がすると同時に地面が赤く染まる。

エリスは紘の腹から手を抜いた。

「ふん、やはり人間は脆(もろ)いものだな」

そして冷めた無表情で紘を見下した。

「さて、貴様の血が無くなる前に飲んでしまうか」

口からは血が流れるのが止まらない。

このままなら出血多量で紘は絶命してしまうだろう。

そう、普通ならば。

「あはははははははははははははははははははははははーーーー」

紘は壊れたように笑った。

「なんだあいつは・・・・・」

それを見たエリスは背中に寒いものを感じた。

「何がオカシイ、もしかして死ぬ寸前でイカレたか？」

エリスは知らないかもしれないが紘はゾンビだからこんなことでは死なない。

「おいおい、いきなりで驚いたじゃねぇか」

本当は驚いたなんてもんじゃない。冷や汗なんかダラダラだ。いくら不死身でも死の感覚は怖い。
だから、さっきの笑い声も自分を奮い立たせるためにしたことだ。
だがなにも知らないエリスには効果的だったらしく異様な紘の雰囲気におもわずエリスは後退りをした。

「まったく、普通の人間だったら死んでたよ」

エリスが冷静だったらまずいが、何も分らない得体の知れない化け物だと思い込んでいるエリスには何もできない。

「普通の人間、だと？・・・・・・・・・・・・もしかしてお前も人間じゃないのか！？」

エリスは馬鹿正直に紘の台詞を聞いている。
ここに隙ができる。

「そんな事はどうでもいい。今は黙ってそこで寝ていやがれ！」

そして紘は捨て科白（ぜりふ）を吐いて人間では有り得ない速度でエリスの懐に踏み込んだ。

「まず・・・・・！」

気づいた時にはなにもかも遅い。
紘はみぞおちに上に突き上げるような拳を放った。
エリスは衝撃で身体がくの字のまま浮いたが、そのまま後ろに崩れ落ちた。

「ふぅー」

火事場の馬鹿力って知ってるかだろうか？
人間は普段は５０％ぐらいしか力が使えないように脳が勝手に抑えているらしい。
抑えてないと体に多大なダメージを受けるからだ。
ようはそのリミッターを紘は解除しただけ。
道路の真ん中で倒れているエリスを見て溜め息をつく。

「こいつどうすっかなぁ？」

こいつに殺されかけたから本来ならばほっとくところだけど女の子だから後味悪いしなぁ。
ま、取り敢えず家に連れて帰るか。
こいつに聞きたいこともいろいろあるしな。そうしてエリスを担いで我が家に向かってノロノロと歩きだした。

この時、意外と柔らかくて不覚にもドギマギしたのは内緒だ。

知らないことは幸か不幸か。（前書き）

タイトルがあまり思いつかない？

知らないことは幸か不幸か。

時計の針が２２時３０分を過ぎる頃にやっと家に着いた。

「ただいまっと」

声が広い玄関に静かに響いたが、返って来るのは外の乾いた風の音だけ。

遺跡マニアの両親が発掘の為に海外に発ってから早くも3年の月日が流れた。

最初は絶望的だった料理・洗濯・掃除は得意になり、今では趣味と言っても過言ではないだろう。

靴を脱いで廊下を歩き居間に入り、隣の客間に入る。

１４畳と、それなりに広いタタミ敷きの部屋だ。

「取り敢えずこいつは起きるまで布団で寝かせてやるか」

押し入れから布団を引きずり出して誇りをたてないように置いてシーツを被せる。

そこにエリスを髪を踏まないように気をつけて寝かし、特別だからなと言いながら掛け布団をエリスの上に被せてやって紘は飯の準備をするために居間から台所に向かった。

「さぁーて、始めますか」

紘は袖を捲り、手を洗って戦闘準備をした。

あらかじめ用意しておいたニンジン手に取り、洗う。
それ以降は流れるような動きで工程を消化していく。
まさしくプロの主婦そのもので、完璧な作業だ。
そして仕上げの工程に入ろうとした時に居間から呻き声が聞こえた。

「うぅっ・・・・うぅん」

どうやらエリスが目を覚ましたらしい。
紘は野菜を煮ていた鍋の火を止めて居間に戻るとやはりエリスは起きていた。

「やっと目が覚めたか」

エリスはぼんやりとしていたが紘の声に反応してこちらを睨みつけた。

「貴様、何のつもりだ!?」

「なにが?」

分かっているがあえて聞いてみる。

「なぜ私をこんな所まで連れてきた!」

ほらな?

「理由か?それなら簡単だ。お前に聞きたいことがある」

「聞きたいこと・・・・だと?」

「そう、聞きたいことだ」
エリスは途端に険しい顔になった。
「ちっ、貴様もか・・・・」
明らかに不機嫌な口調で続ける。

「貴様、聞きたいこととは闇の秘術のことなんだろ」
闇の秘術？なんだそれ？
「そんなくだらない物は、いらん」
うんざりそうな顔をする紘を見て拍子抜けなのかエリスは肩を落としたが、その顔には少し安堵の表情があるように見えたのは気のせいかもしれない。
「なら、私に何の用だ。それに貴様は何者だ」
「おっと、そうか。
まだ名前を言ってなかったな。
俺の名前は須川紘だ、一応ゾンビをしている」
「はぁ？ゾンビだと？なんだそれは」
「お前ゾンビも知らないのか？ゾンビというのはなぁテレビやゲームなどで出てくるーーーー」

「そんな事は知っている。だがそんなのが現実にいるなんて見たことも聞いたことも無いぞ！」

「んなもん知るか！ただ単に不死身で陽光に弱いからゾンビだと俺は思ってるだけだ」

もしかしたら他に呼び方があるかもしれないが専門家ではないのでわからん。

エリスは「陽光に弱いということは闇の何かか？いや、だけどそんなはずは・・・・」などとブツブツ言っていたがそこは説明のしようがないのでスルー。

「そうだ。なあエリス、お前の事を教えてくれ」

「私のこと？」

「そう。吸血鬼はどうのってのは聞いたが、よくわからん」

エリスはそうだなぁと顎に手を当てて何もない空間に表示枠（サインフレーム）と文字盤（キーボード）が出てきた。

「なんだそれ？」

「ん？これか？これはだな、私が作った術式デバイスだ。簡単に言えばパソコンみたいなものだ」

文字盤を叩いて表示枠を開いたり閉じたりしてながらあるところで止まった。

「ヒロ、これを見ろ」

エリスは紘に見やすいように移動してひとつの表示枠を指差した。
「これは自分で言うのはおかしいな話だが、当時世界でかなり騒がれた事件だ」
そこには信じられないものが映っていた。
『聖(セント)ジョージ大聖堂、一夜で崩壊』
『３００人殺しのエリス』
『エリス暗殺の任を受けていたイギリス騎士団壊滅』
など、数え切れないほどの事件が時系列順に載っていた。
「これはほんの数千年前の出来事だ」
「すうせん！？」
「そんなにびっくりすることはあるまいて。
伝承や物語などで聞いたことないか？吸血鬼は人の血を飲んでいるから不老不死だと」
確かに、アニメやマンガの吸血鬼はやたらととんでもない歳だった気がする。
「話を戻すが、欧州(ヨーロッパ)で魔女狩りが流行った時期があったんだ」
紘もそれは世界史の時に習った。

元々は中世末期の約１５世紀に、民衆裁判の異端審問が始めとされてお り、その定義はかなり大きい。
例えばその昔、悪魔が人間に影響を及ぼすと考えられていてそれを受けた人間が魔女だとされていたのもその一つだ。

「まあ、私の存在はその時の旧教（カトリック）にとっては棚ぼただったらしく、魔女狩りに拍車をかけてしまう原因になったんだ」

現代ではあまり認知されていないが、未だ続く深刻な問題なのだ。
そのせいで迫害を受けている人もいるらしい。
それを広げるきっかけになってしまったエリスの気持ちは計り知れないものであるはずだ。
しかしエリスはおかしそうに笑った。

「どうだ、かなり愉快なものだろ？」

「んなわけ、あるか！」

紘は思わず怒鳴ってしまう。

紘は表示枠を見ていくとあることに気がついた。

「あれ？こっからしたになにも書いてないぞ？」

紘は指差してエリスに訪ねた。
そこには年号だけしか書かれていない部分があったのだ。

「ああ、そこはただ単に私が封印されたからだ」

「は？」

さらりとすごいことを言われた。

「はぁぁああ！？」

驚いて声を張り上げたらエリスはうるさそうに耳を塞いだ。

「何をそんなことで驚いている」

どうでもないように言ってめんどくさそうに頭を掻く。

「考えてもみろ、恐怖の根元が現れたら普通はどうする？」

「そりゃあ、みんなで倒そうと・・・・！！」

そこで紘は気づいた。

その表情を見てエリスは満足そうに頷く。

「そう、みんなで倒しに掛かる。そういうことさ・・・」

何ともないような表情を見せるが、少し哀しそうな雰囲気に見えた。

どんな理由があるにせよ、全ての人間に怖がられるのはあまり良い気分とは言えない。

「・・・」

何も言えなくなった紘を気にしないでエリスは視線をある場所に固定した。

「ヒロ、あそこにあるガラクタの山は何だ？」

指差した方向にはこの部屋に似つかない不自然な鉄くずの山がある。
しばらく言いずらそうにしていたが、やがて口を開いた。

「あ～、あれはだな。クソジジイ・・・知り合いが持って来てどう扱って良いか分からないからそのままにしてあるんだ」

あれは確か、丁度2年前。
いつの間にか消えていたクソジジイが突然帰ってくるなり置いていったものだ。
話を聞いたエリスは立ち上がりガラクタの山に近づく。

「ヒロ、これをどこかに片付けたいと思ったことは？」

「あるけど？」

「ならなぜ片付けなかった？」

紘はなぜエリスがそんな事を聞いてくるのか分からない。だけど素直に答えなければいけない気がした。

「いや、なんとなく片付けちゃいけない気がして・・・」

もしかしたら片付けてないのを怒っているのかと思って申し訳なさそうに言った。
それを聞いたエリスは「やっぱりな」と呟いてガラクタに手を近づける。

「・・・・っ！」

触れるか触れないかという所まで近づけていたのに突然、エリスの身体が震えて手を引っ込めた。
心配になった紘はエリスに駆け寄ると、全身に鳥肌が立っていた。

「おい、どうしたんだよ」

紘の声に振り向いたエリスは青ざめた顔で短く告げた。

「これには、強力な術式が、かけられて・・・・い、る」

言い終わると同時に全身の力が抜けたようにグラッと傾いた。
慌てて肩を抱くと身体は氷のように冷たかった。

「おい、どうしたんだよ！おい！？」

どうやら気絶してしまったらしいが、息が荒く苦しそうだ。
どうしたらいいのか分からないが、とりあえず布団に寝かせて掛け布団を被せる。

「っくそ、どうしたらいいんだ！」

そう言っている間にもどんどん青ざめて真っ白になっている。
紘は分かる。このままではエリスが死んでしまうことを。

「かといって吸血鬼だから普通の薬が効くのか？・・・・・・いやまて、吸血鬼？」

紘は何かに引っかかっていた。
胸につっかえるような、何か大事な事を忘れているような。
よく思い出すように顎に手を当てて考える。

そして、あることに行き当たる。

「そうか、血だ！」

何でこんな簡単な事に気づかなかったのか。
吸血鬼といったら血ではないか。
そうと分かれば話は早い。

「待ってろ、エリス。いま助けてやるから」

紘は親指を口に当てて噛み切る。
口の中に鉄錆の味が広がるが無視してエリスに向けた。傷口を絞るようにしてなるべく多くの血が出るようにしてあげる。

親指の先端に溜まっていた滴は重力に負けてそのまま、下にある口に落ちていく。
ビクンッ！
エリスの身体が大きく揺れる。
それに驚いた紘は顔を覗き込む。

「おいエリスどうし――――！！」

言葉は続かなかった。
なぜならエリスに顔を掴まれていたからだ。

「ぐぁっ！？」

万力のように締め付けに頭蓋骨が軋む。

「うぐっ、ふぅっ！」

そのまま投げ飛ばされて壁にぶつかる。
ベキボキッ！
背中で幾本かの骨が折れる音が響く。

「ぐあっ、ぐふぉあ！？」

エリスはゆっくりと立ち上がる。
肩に掛かっていた布団がずり落ちて埃を立てる。
見ると青い瞳が赤色に輝いて、血走っていた。

「・・・血を・・・よこせ」

地獄の底から響いてくるような低い声。
紘は、恐怖で足が震えた。

「バッカ！なにヒビってんだよ。
しっかりしろ俺！」

そうだ、逃げてはダメだ。
エリスに血を飲ませるのだから。

「うっし！」

頬を力強く叩いてから紘は、なけなしの根性を振り絞って意を決した。
エリスにゆっくり近づいてそして思いっきり抱きしめた。

「ほら、思う存分飲みまくれよ。
なんなら飲み干してくれたって構わない。

こんな機会は滅多にないから良い経験になる」
冗談を言って自分を落ち着かせる。
「血！ち・・・だ！」

エリスは震える手を紘の首の動脈に当てると、強く引っ掻く。
それだけでかなり深く切れて溢れるように血が滴る。
それに口を当てて強めに吸っていく。

「ちゅ、じゅる・・・ごきゅん」

なるほど、これが吸血鬼に血を吸われるってことなのか。ってか、
蚊よろしく牙でガブリじゃないんだな。
やっぱりアニメなんて現実とは違うわけか。
あ～くそ、いい匂いするじゃねぇかよ。
そういえば、女性をこんなに近くに感じた事は母親以外にないよな。
おいおい、なんつーやわっこい華奢な身体なんだよ！
少し力を込めたら折れそうだなこれ。
そんな感じで紘はいろいろ考え（悶え）ていた。
すると、目の前が白くなっていく。

「あれ、なんだこれ？」

身体が重い。
力が入らない。
そんな事に戸惑っているとエリスが傷口から口を離した。

「おい、ヒロ。なんだこれは！？」

どうやら気がついたらしい。

「なんだよ、自分で、やっておいて・・・」

そう憎まれ口をたたいたっきり、紘の視界はブラックアウトしてエリスに全体重を預ける。

「ヒロ！おい、ヒロ！？おい――――」

エリスの心配する声を遠くに感じた。

何が３００人殺しのエリスだよ。

何が恐怖の根元だよ。

普通の女の子じゃないか。

紘はエリスにそう言ってやれない自分を悔しく思いながら意識を手放す。せめてこの想いのカケラでも伝われと願ながら。

知らないことは幸か不幸か。（後書き）

魔女狩りはＷｉｋｉｐｅｄｉａで調べましたけどそれを活用するのは難しいですね。

おかしいと思うかもしれませんが理解のほどを。

誤解と勘違いの差。（前書き）

かなり誤字脱字が多くて困ります。

誤解と勘違いの差。

自分以外の物音がしない客間でエリスは布団で寝ているヒロの隣で術式デバイスを操作している。
ヒロの身体を赤と青のリングが頭を超えたら足へ、足を超えたら頭へを繰り返し交互に往復していた。
表示枠(サインフレーム)に人体の簡易図と各部名称、体温や血圧に脈拍が表示されて、様々な情報が随時更新されている。
どうやら人体をスキャンして異常がないか検索しているらしい。
それを見たエリスは「ふぅ」と安堵の息をつく。

「とりあえず問題はないか」

全ての数値は通常と違い、かなり下回っているが絶命することはなさそうだ。
あれだけの血を吸われたのにこの結果はかなり異常だが、ヒロが言うとおり、ゾンビとかの特性だろうか。そもそもゾンビとはどんな存在なのだろう？
表示枠を見る限りでは普通の人間とほぼ同じ。
違いがあるとしたら血中魔力濃度がとんでもなく多いことだ。
これは自然治癒力を高める為だが、それが吸血鬼のそれとは格段に違う。
試しでさっき腕に傷を付けようとしたが、傷ついた時に一瞬のタイムラグはあるがすぐに消えてしまった。
エリスが血を吸った時とは段違いに治癒力が上がっている。
これは驚くべきものだが、それより重要なものがある。
それは・・・。

「魔装紋(まそうもん)・・・」

ヒロの身体を幾何学的な模様が蔦のように絡み合うようにして光っていた。『魔装紋』とはその昔、魔法が使えない人間を無理矢理にでも使わせようとして創られたものだが、無理矢理すれば身体が耐えきれずに壊れてしまうのは当然の事で、それ故に禁忌中の禁忌とされた。

「それがなぜヒロに・・・」

疑問を言葉にするが、答えるものはいない。
文字盤を叩いて情報を整理しながら横目でヒロの様子を見ると、少し変化していた。

「・・・魔装紋が消えてる」

さっきまではっきりと光っていた。
だがそれは初めからなかったかのように消えている。
分かっていた事だが、ヒロの魔装紋は必要時以外は消えてしまうようだ。
こうやって出たり消えたりする魔装紋は珍しいが、無い訳ではない。
エリスも魔装紋を使っている人を何度も見てきた。
その中にもこのようなタイプのものがいた。
そういう魔装紋はかなり強力なのだそうだ。
先ほど聞いた感じでは、ヒロは気づいていないようだが。
・・・・少し、調べた方が良さそうだな。
そう1人ごちてから、文字盤を叩いてリングを消した。

気づけば、そこは闇だった。
いきなり何の話だ！と思うだろうが、実際そうなのだから仕方がない。
ヒロは、ぼやけた頭で周りを見るが、何がなんだか分からなかった。

「ってか、何で俺寝てるんだ？」

まだ、はっきりしない感覚で分かるのは布団で寝ていることと、なぜかすごく疲れていること。いつの間にか寝ているのは紘にとってよくある出来事だが、知らない内に疲れているのはまだ未体験だった。
確か、今日は疲れる事はしていないはず。
睡眠は（授業の時間を使って）しっかりとってあるし、運動は（加減ができずに）したくても出来ないし。
こんなに疲れる要素はどこにもない。
もしかして夢遊病！
自分の身体に起こったであろう事に驚愕していると、あることに気がついた。

「そうか、エリスだ」

今日は、金髪ロリ吸血鬼に出会うという人生で幾度（いくど）と起こりえないイベントが発生したのだった。
そこではさまざまな初体験があり、お持ち帰りまでしたのだった！
・・・・・・・どうやら紘の中では、ちょっと・・・・いやかなりの都合よく美化されているらしい。

「そんで、エリスが禁断症状を起こし、襲われて今に至るわけか」

真実を思い出して安堵した。

どうやら今、かなり疲れているのは貧血なだけらしい。
さっきより感覚がはっきりしてきたので改めて周りを見ると、どうやらここは客間のようだ。
上体を起こして眠い目をこする。

「それより腹減ったなぁ～・・・・って、あれ？」

そこで紘は気づいた。
なぜか身体全体がやけにスースーすることに。
どうした事かと部屋の明かりを灯すために紐（ひも）を引っ張った。
そして眩しさに慣れない目を瞬（またた）かせて己の身体を見る。そこには生まれたままの姿ーーーーーー簡単に言えば裸ーーーーーーに紘は、なっていた。

「な、ななななな！はだ、はだはだはっ、はだだぁぁぁああ！？」

理解不能の叫びをあげてしまう。
すると、腰の所に温かい感触が有ることに気がつき、それがもぞもぞと動き出した。

「なんだ、ヒロぉ？」

眠そうに目を擦りながら掛け布団から顔を出したのは幼さが残る金髪の少女だ。
肌にダイレクトに伝わる危険な信号によると、紘と同様に裸なのだと予想ーーーーーいや、確信する。

「おぴゃぁっ！」

紘は動揺し過ぎて変な鳴き声を発した。

まてまて、何だこれは。
なぜエリスがこんな所に？
いや、問題はそこではない。これでも充分に問題だが、そこは無視しよう。
なぜ2人は裸なのか。
俺はこの世に生を受けてから早17年、こんなイベントは一度も遭遇した事はないぞ。
紘の心臓はラスボス戦のようにBボタンを連打していた。

よし、冷静になろう。

そう冷静に

冷静に

冷静に

心を落ち着かせるために深呼吸をする。
早鐘のようにボタン連打する心臓はボスを倒して静まる。
しかし、冷静になれば動揺して感じなかった感触もはっきりしてくるわけで、腰から伝わる温かさが女っ気のないささくれた心に染み渡ってしまうわけである。
あぁ、女の子ってこんなに柔らかいんだ。

って、うおぉぉお！
冷静になんかなれるかー！
おもわず叫びをあげたくなる。

さらに混乱しようとしている自分を必死に抑える。
俺の記憶ではエリスに血を飲ませて・・・・ってあれ？そこからの

記憶が無くなってる。
も、もしかして俺はそこで若きマグナムを使ってしまったのか！
紘がムンクの叫びみたいになっているのに気づいていないエリスは少し潤んだ目と上気して赤くなりながら恥ずかし気にいった。

「ヒロのは・・・結構良かったぞ、かなり濃かったからな」

誤解の無いように言っておくが、エリスは紘の血の事を話している。
従って、さっきの文は。

『ヒロの（血）は・・・・結構良かったぞ、かなり（魔力が）濃かったからな』

となる。
ちなみになぜ裸だったかというとエリスは裸でなければ寝れない体質だからだ。
当然、そんな事を知らない紘は自分の息子がハッスルしたのだと思い、さらに青くなる。

「少し（傷口を）大きくし過ぎたから心配だったが、どうやら大丈夫なようだ」

これも紘は分からないのでもう真っ白だ。
おいおい、バカ息子が。なに限界突破してんだよ！！

「俺ってやつは！俺ってやつは！」

「おい、いきなり壁に頭をぶつけだしてどうした？」

すごく心配そうな顔で紘を見た。

「ごめんよエリス。俺の意志では（欲望を）止められなかった。ホントにごめんよ」

「いや、別に（血は）止めようとして止められるものじゃないだろ？」

うぉおお、何だ！女神さまなのか！？
あんなことを（たぶん）してしまったのに許してくれるというのか！

「ありがとうエリス。ちゃんと責任は取るから」

「はぁ、責任だと？」

そこでやっとエリスは相互の間で認識の食い違いに気がついた。

「なんだそれは？」

「そうか、無かったことにしたいんだな？
よほどショックな出来事だったのか・・・・あぁなんて事だ・・・・」

「ひとりで納得してないで説明しろ」

いやいや、分かっているからと温かい笑みを浮かべて頷いている。
エリスは、わけわからんとため息をついた。とりあえず、術式デバイスを出して表示枠に手を突っ込んだ。
すると、水に手を突っ込んだように波紋が出て腕を飲み込む。
そして何かを引っ張り出した。

「・・・服？」

少し大胆な黒い肌着と、同じく黒いワンピースを取り出した。
どうやら術式デバイス（アレ）は倉庫代わりになるらしい。
それに着替えながら紘に話しかける。

「なあ、ヒロ。お腹空いたんだが・・・・何かないか？」

くぅ～、と可愛らしい音が鳴りエリスは少し頬を染めた。

パパのいうことを聞きなさい！（前書き）

更新が遅れ気味になっていますね。

パパのいうことを聞きなさい！

「うまい！」

わざと薄暗くした居間にエリスが歓喜（かんき）の声をあげた。
食卓の上には野菜いっぱいのスープとアジの煮物などが並んでいる。
それを瞬く間にエリスは減らしている。
その食べっぷりはちょっとした感動ものだ。
そしてまた紘に空になったお茶碗をよこした。

「はいはい、おかわりだよな♪」

エリスは、コクリと箸（はし）をくわえたまま嬉しそうに頷いた。
紘は炊飯器からありったけよそってからエリスの手に乗せる。
山盛りのご飯を受け取りエリスはいきなり思案顔になった。

「これはなんとも・・・・えっと――――」

どうやらリアクションを考えているらしい。
そして考えること１２０秒。
ゴホンっ、と咳払いをした。
どうやら考えがまとまったらしい。
最終的に思いついた究極のリアクションとは何かと紘は少し期待した。

「そう、煌(きら)びやかだ！」

「・・・・」

それは味覚ではなく視覚だろというツッコミはとっさには出なかった。
そして固まり続けて数分後にやっと再起動した。
はぁ、とため息をついて紘は残念な顔になる。

「おい、さんざん悩んでその科白(せりふ)は無いと俺は思うがどうなんだ？」

そう言った瞬間に顔を真っ赤にして「うるさい」と怒鳴った。
それに対して紘は温かく笑ってあげる。

「ま、気持ちはその表情だけで充分に伝わったから、無理に言葉にしなくとも大丈夫だ」

エリスは「そうか」と頷いて再び満面の笑みを浮かべて食べ始めた。
それが無性にうれしくて笑みを深くする。
もしかしたら俺に娘がいたらこんな感じなのかな？
だとしたら悪い気はしない。
そんな妄想をしているとエリスが訝しげにこちらを見ているのに気がついた。

「ヒロ、どうした。そんなにニヤニヤして」

おっと、どうやらニヤニヤしすぎていたらしい。

「いや、なに。可愛い娘が出来たみたいだと思ってな・・・・！」

そう言いつつやばいと思った。
たぶん子供扱いは拙い。
エリスみたいな、こういうキャラは決まって身長を気にするのだ。
それはエロゲの定番中の定番。
エリスをみると俯いてしまっている。
これは拙い、非常に。
どれくらいかというと、いつだか幼なじみである紗幸（さゆき）の誕生日プレゼントを忘れてボコボコにされた時よりだ。
何？訳分からんだと？
そんなもの作者が伏線を引きたいだけだから今は分からんでも良い。
とりあえずいま紘は、青い顔をして冷や汗をダラダラさせながら頭を下げる。

「え、エリス、すま－－－－」

「・・・・・・・き」

慌てて謝ろうとしたらエリスが何かを言った。
「き」ってなんだよ！
訳も分からず混乱を加速させる。
もしかして相当怒っておられる！？
そ、そうだ！
我ら日本人にはこういう時の為の素晴らしい必殺技がある。

（ＤＯＧＥＺＡ）

そう、ご存知の技。土下座。
これだ、これで大丈夫なはずだ。
しかも俺のは他とは格段に違う。
その名も－－－－。

『トリプルアクセル土下座』

これは凶暴になった紗幸の機嫌を直すために1ヶ月の山籠もりの果てに編み出した至高の一品だ。
そしていざ発動しようと初動準備をしていたら、エリスが顔をあげた。

「・・・・」

その表情におもわず絶句した。
ただし恐ろしい般若(はんにゃ)みたいな顔ではない。そこは我が幼なじみとは違う。
エリスはとても無邪気そうな笑みを浮かべていたのだ。それは小さな身体にとてもマッチしていてかなり可愛い。
そして次の科白でトドメを刺される。

「パパ、大好き♪」

「・・・・」

おい、なんだよ今の。
とんでもない破壊力じゃないか。

「・・・・え」

紘は今までない言葉にワナワナと肩を揺らしていてエリスの「冗談だ」という科白は耳に入っていない。
そして一気に感情が吹き出した。

「エリスぅー♪」

おもいっきり抱きしめてナデナデしてあげる。
ああ、なんて可愛いんだ。
しかも『パパ、大好き』だって？
おいおい、あえなく撃沈、黒焦げだよこんちきしょー。

「可愛いなぁ、お前は。ずっと抱いていたい」

ああ、ありがとうございます、ロリの神さま。
居るか分からないけど。

「こら、ヒロ。何をするか！！」

エリスが顔を真っ赤にしてどうにか逃げようとするが、逃がさない。
それでエリスはどうにかしようとジタバタと暴れる。

「おい、ヒロ。離せ」

それなりの強さで蹴ったり殴ったりしているがびくともしない。

（なんてタフな奴だ）

それにイラッとしたエリスは少し考えて不気味に笑いながら紘に抱きつく。

「おぉ、なんと！」

紘は自分の危機に気づいていないでバカみたいに喜んでいる。

「ねぇ、パパ？」

「なんだい？」

俯いたエリスの顔をのぞき込むようにする。

そこでやっとエリスが背筋の凍るような笑みを浮かべているのに気づいた。

慌てて離れようとするがエリスは紘をしっかりホールドしていて無理だった。そしてエリスは青ざめた紘にこう言った。

「しつこいぞ！！」

そのままエリスは力いっぱい引き締めて紘の背中を砕き、紘は激痛の中で意識を手放した。

明らかに変な格好で倒れている紘を見てエリスは荒い息を整える。

「まったく、とんだロリコンだな」

腰に手を当てて上体をそらせる。

腰の骨がコキコキなる。

それをしながら天井を見ながら落ち着こうとするが、ドキドキしてしまう。

紘の乱暴だけど優しい温もりが変な気持ちにさせて困る。

「むぅ〜」

紘が起きていないのを確認してから抱きつく。

「！？」

意外と厚い胸板でビックリした。

こんなんでも男の子なんだと思わせる。

感触を楽しむように頭をグリグリと押し付けた。
しばらくしてゆっくりと瞼(まぶた)を閉じてボソリと言う。

「パパ・・・大好き――――」

それは容姿相応の声、想いだった。
エリスの父は生まれる前にはもう死んでいて、母もエリスが6歳の誕生日を迎えてからしばらくしてやがて殺された。
親の温もりを、いや。
ずっと1人で生きてきたエリスは人肌の温かさを知らずに血の臭(にお)いにまみれて生きてきた。
これで良いと思った。
人の温もりなど邪魔なだけとも思った。
いつからか、だれも恨(うら)まず、恨まれるだけの存在になっていった。
冷酷に、残虐に、来るもの全てを拒絶していった。
だが、この男はいくら不死身といえど、腹に風穴をあけられたのに恨みもしないで逆に受け入れている。バカなのか、それとも・・・・。
よく分からない。

「ヒロ、ありがとうな」

小さく鈴が鳴るような声は虚空に消えていった。
その代わり、ヒロに回された腕に少し力が込められる。
これが、今思えばエリスの何千年分の甘えだったのだろう。

パパのいうことを聞きなさい！（後書き）

少しグダグダ感がありました。

学校へ行こう（前書き）

キャラクターの設定が固定できません！

学校へ行こう

朝の3時ちょっと過ぎに起きた紘は、隣に寄り添うように抱きついきながら寝ているエリス（服着用）を起こさないようにはがして、台所に向かい携帯片手に目玉焼きを作っている。

「おい、クソ親父。ちょっと頼みたいことが――――って、あぁ？
ピラミッドの欠片なんかいらねぇよ！
ならサソリの剥製はいるかだと？
んなもん家に置いてみろ、幼なじみ様に家を燃やされる。
やっぱり、テメェじゃなくて母さんと代われよ。
そうじゃないと話にならん」

ため息をつきながら目玉焼きをお皿に盛って、野菜などをトッピングする。

「あ、母さん」

途端に明るい声になった。

「ごめん、こんな時間に。忙しかった？――――なら良かった。
もし辛かったら、あのクソ親父を刺して日本に帰って来てもいいから。
あ、大丈夫？
なら後ろで泣いてるむさい中年を静かにさせて。
うん、ありがとう。
それで、ひとつ頼みたいことがあるんだけどいいかな？
まずは――――」

そうやっていろいろ準備をしていると食卓の上には、いつの間にか朝食が出来上がっていた。

「ありがとう、頑張って」

と言ってから電話を切った。

「ふぅ」と一息ついてから濃いめのコーヒーを煽る。

「そろそろ起こすか」

なぜか痛い背骨をゴキゴキ鳴らしながら机の後ろで寝ているエリスを見た。

この少女は幾千も前から生きているらしい。

皆が死んでいく中、自分が生きていくのはどんな気持ちだろう。

「人間５０年なんて嘘だよな」

暗い気持ちを吹き飛ばす為に冗談を言う。

「そもそもヒロ、私たちは人間ですらない化け物だろ？」

「まあ、そうだがな」

ってか、エリスさん。起きていたのですか。

それにしても、化け物・・・・ねぇ。

「そういや、クソジジイが言ってたっけな。小さな者にしたら人間も充分に化け物だって」

まあ、俺の学校のクラスを見れば化け物なんてレベルじゃないがな。

「とんだへそ曲がりな理論だな」
そう言って身体を持ち上げて術式デバイスを起動させていくつかの操作をする。
文字盤を操作しながら表示枠をタッチしてしばらくすると消えた。
「いま、何をしたんだ？」
「身体をある程度の範囲で洗浄するシステムを起動させただけだ」
そう言い終わる前にエリスの周りに半径５ＣＭぐらいの小さな魔法陣が複数出現した。
そこから空間を割って出たのはハムスターをデフォルトさせたようにいい加減な生物が赤、青、黄の順番で現れた。
「エリスたま、洗浄ですね？」
「洗浄ですね？」
「戦場ですね？」
「扇状ですね？」
なんだか山びこみたいだと呟いたがなぜか無視された。
ってか、最初の２匹以外言葉のニュアンスが違っているが良いのか？
「こいつらは私の身の回りを世話してくれる召喚獣。
まあ、ブラウニーみたいなものだと思ってくれれば間違いはないさ」

ブラウニーとは、身長１Ｍ弱で毛むくじゃらのホームレスみたいなおっさん妖精で、人間がいない間に家事や家畜の世話をしてくれる一家に１匹は欲しい便利屋さんだ。
最終的にはサンタに弟子入りしてサンタになるらしい。
以上、ｇｏｏ　Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより参照。

「おっさんじゃない」

「みたいなものだと言っただろ？
そもそも、絵面からして毛むくじゃらのおっさんは嫌すぎるだろうが」

まあ、この方が和むからいいんだけど。

「デネ、アル、ベガ。ささっと洗っておくれ」

『了解しました！』

言うなり、エリスは光に包まれたと思ったらすぐに消えた。
そこにはウェーブのかかった髪を後ろでひとつに結われてそれにマッチするように白のワンピを着たエリスが立っていた。
その間、コンマ０．５秒。

「ふぅ、スッキリしたぁ」

きれいになったからなのか分からないが、なんとなく光っている気がする。
それに、女の子らしい甘い香りがする。

「魔術ってすげぇ」
驚きの声をあげるとエリスはこちらを見た。
「やってみるか？」
「え！？いいのか？」
紘はパァっと目を輝かせた。
実をいうと紘は魔女っ子アニメのもうれつな信者で、オモチャの魔法のステッキを買って夜な夜な特訓する日々を未だに続けていたクチなのだ。
それだから魔法を直にふれる事ができるこの機会を待ちわびていたのだ。
「じゃあ、おねがい――――」
「ただし、人体を電子レベルまで分解されるのに躊躇いがなければのはなしだが」
「――――しなくていいや」
そんなもの躊躇いがあるに決まってるだろ！！
天国から地獄に突き落とされた気分だ。
「なんだ、遠慮するなよ。失敗しても不死身だから運が良ければある程度は元に戻るぐらいのものだろうが」
「それが一番危ないんじゃボケー！」

思わず関西弁になるほどの心の底からの叫びだった。

そんなこんなで朝食の目玉焼きをパンに挟んで食べながら紘はエリスにある話題を持ち出した。
それはさっき電話で母に頼んでいたものと関係があった。

「今日は平日の水曜日だ」

「そうだな」

エリスはパンの端から黄身が垂れるのと葛藤していて紘の話は聞いていない。
こういう反応をされることは分かっていたので話を続ける。

「俺のように真面目な人間は働く必要がある」

「そうだな」

コーヒーを一口舐めて苦そうな険しい顔になる。
一度置いてから持っていたティースプーンをカップの後ろ（紘から見て手前）に置いて再び飲み始めると幸せそうな表情になった。
何も変わっていないように見えるが、ティースプーンを置くときに袖を通して角砂糖をこれでもかというほど入れていたのを紘は見逃していない。

「しかーし、社会人になるにはまだまだ未熟な人間には修行の場がある」

「そうだな」

一息ついてコックリコックリとエリスは舟を漕ぎ始めた。
ここまで言わせておいて紘の言いたいことに気づかないのはどうしてだと悩む。

「さあエリス。その修行の場というのは何だと思う？」

「・・・・ｚｚＺ」

エリスに話を振ったが、すでに夢の中。
ワナワナと肩を震わせて顔を真っ赤にする。
すぅー、っと息を吸い込んで大声で怒鳴る。

「人の話を聞けぇぇええ！！」

「ふぉ！？」

びっくりしてキョロキョロと周りを見渡す。
そして怒っている紘に気づいて恨めしそうに睨む。

「なんだ？」

「なんだじゃねぇよ。人が話しているのに寝る奴がいるか！」

「ヒロ、お前の話は要点を得ていないから何を言いたいのかさっぱりで眠くなる」

わざと遠回りで言っているのにそれを「眠くなる」のひと言で終わらされてがっくりとする。

「ぬぐぐっ、まあいい。ならハッキリと言うが今日、わたくしめは学校にて勤勉の義務を果たしとうございます。ですがわたしめの周りには華が足りのうございまする」

「ふーん、それで？」

何ともないように言われた。

「ですからわたくしは華を追加したい」

ここまで言ってまだ分からないのか。

「だから俺はエリス、お前と学校へ通いたいんだ！」

面倒くさくなって本題を話す。

するとエリスはポカーンとした顔になり何を言われたのか分からないという表情になる。

「今、何て言った？」

「だから俺と華やかな学園生活を送りましょうと言ったんだよ」

ようやく理解したのかしばらくはフリーズしていて徐々に再起動した。

「はあぁぁああ？」

どこかの超サイヤ人の技が発動した時のように聞こえる。
「何を言っておるのだ、私に今更学校へ通えだと？冗談じゃない」
そのまま部屋を出て行きそうな勢いだったのでまあまあのと落ち着かせる。
「学校は楽しいぞ？いきなりズドンと校庭が爆破されたり、世紀末覇者みたいなバトルが展開されたり・・・・」
「何だそのカオスな日常風景は」
呆れた顔をされた。
エリスは「はぁ」とため息をついて少し真剣な顔になる。
「そもそも、お前は昨日。私に殺されかけただろ、忘れたのか？」
「確かにそうだが、それがどうかしたのか？」
「どうかしたって・・・・あんなことされて怖くなかったのか？」
紘はう～んと唸ってから答える。
「怖くなかったと言ったら嘘になる」
「そうだろ？」
笑って頷くが、エリスの目が哀しげになったのを紘は見てしまった。

「しかし、それだけだ」

紘は少しエリスから視線を離して話す。

「もし、俺に本気で危害を加えたいなら俺が気絶したときに幾らでも出来たはずだ。そうなったらいくら不死身と言っても適うわけがない」

「・・・・」

エリスは無言で紘の話を聞いている。それは真偽を確かめるためもあるかもしれないが、紘にはエリスが救いを求めているように感じた。気のせいかもしれないが、いまは自分に都合の良い方を捉える。

「だが、見てみろ。俺は何もされてない」

身体全体を見せるようにくるりと回ってみせた。

「これはエリス、お前が危険な存在じゃないってことだろ？」

エリスを見ながら頷いている。

何かを思考するような仕草になってエリスはうすら笑う。

「ヒロ、お前の考えは甘すぎる。

身体が無事だから危険がないだと？

幸いにも、世の中には時限式魔法というのがある。

数日後に突然、ボンっ、なんてよくある話だ。

しかも、私は全世界共通の悪だ。

何をされても文句は言えないぞ？」

紘に問いかけるエリスは諭すように言う。
それに対して紘は何ともないように言った。

「大丈夫だろ」

「何を言って――――」

目を吊り上げて怒鳴ろうとしたエリスの頭に手を置く。

「そう言うってことは、本気でやることはしないってことなんじゃないのか？」

紘に言われて目を少し見開いて、閉じた。

＞ほぅ、見ていないようで見ているな。しかし、確信ではなくほとんど勘(かん)みたいなものか。馬鹿なのか違うのかの判断はしにくいなだが

＞馬鹿は馬鹿なりに楽しめるか＜

エリスは、紘を見ながら肩を震わせたが、怒りからくるものではない。

「くくっ、まあ何でも良(ょ)いか。
わかった、学校にでもなんでも行ってやるよ。
その代わり、ヒロの血は私の自由にさせてもらうぞ」

「了解！」

ヒロは強く頷いてからエリスの手を引く。
「ならさっそく、学校へ行く準備だ」
それを聞いてエリスは驚き、足を止める。
紘は引っ張られてガクンとなった。
「待て待て待て、行くもなにも私は入学の手続きすらしてない」
エリスの問いに紘は問題ないと親指をたてる。
「エリスの入学手続きはもう終わらせてある」
「何だその行動の早さは。昨日、今日で出来るものではなかろうに」
「それが出来るのがうちの学校なんだよ」
だから安心しろと嫌に爽やかな笑みを浮かべて再び歩き出す。
「だから待てと言ってるだろ！
そもそも、私は制服を持っていない。それがなければ問題になるだろ？」
「それも大丈夫だ」
そう言いながら突き当たりの扉を開ける。
中は居間の半分ほどの広さの寝室だった。
「ここは母さんと人間のクズの部屋だ」

紘はベッドの横にある押し入れを開いて洋服棚の中を漁った。

「確かこの辺に・・・・あった！」

紘は手のひらサイズの5角形のものを取り出した。
そこれは、白い睡蓮(すいれん)の刺繍(ししゅう)がされたワッペンだった。

「何だこれは？」

「これは我が校の校章だ」

「なぜこんなものを探していたんだ？」

「俺の学校は校則がゆるゆるで制服なんて着なくても問題ないんだ」

エリスは、ポカーンとした顔で魂が抜けている。

「おい、エリス！どうした！？」

はっ、と目を見開いて現実逃避はやめる。

「いや、何でもない」

エリスは、あんなこと言わなければ良かったと今更(いまさら)後悔した。
かくして、エリスのスクールライフは幕を開けたのでございまぁーす。

歩けば狐！？（前書き）

久しぶりの投稿です。

話の筋は出来ているのに文が思いつかないのは困りものです。

歩けば狐！？

薄暗い学校前の坂をエリスと紘は歩いている。
只今の時刻は5時をすぎたあたり。
普通はこんな早い時間に登校する人などいないだろう。

「なあ、ヒロ。こんな早くに登校しなくても良くないか？」

「ところがドッコイ。俺はゾンビだから朝日を浴びたらぶっ倒れる」

そう、いつだかも寝坊して家を出た瞬間に倒れて危うく警察沙汰になるところだった。
運良く紗幸が通りかかって学校まで引きずってくれたから良かったが。

「それは吸血鬼も同じじゃないのか？」

紘の疑問は当然のことであろう。
伝承などでは吸血鬼＝ニンニク嫌いで日光が弱点、それが当たり前だ。
だがエリスはハ、と小さく笑った。

「まあ、それがお前ら人間が陥(おちい)る間違いだな。
考えてもみろよ。そんなに解りやすい弱点があったら私はとっくの昔に死滅してるだろう？」

それもそうか、と納得。

「そんな俗説が広がったのはあらかた、最凶無敵の私を怖れたバカ

な人間が、すがりつきたいが為に創ったものだろうな」
エリスもふざけて苦手なふりをしたらたちまち広がったんだそうな。
いろいろあるんだろうと、紘は自己完結した。
話を変える。
今から話すのは、とても重要な事だ。
「これから学校に行くわけだが、注意事項がある」
紘は厳かに話す。
あの学校に1年過ごしてきて自分なりに考えた決まりだった。
いいか？
「一つ、誰かが奇行に及んだら真っ先に耳と目を塞げ。
二つ、誰かに何か頼まれても断れ。
三つ、自分の意見は力ずく。
そして、四つ、・・・・！」
紘は何かに気づいて飛び退いた。
そして、当然、さっきまで自分がいた場所に”火の球”が降ってきて爆発する。
アスファルトがひしゃげる前に溶けて飛び散った。
紘の頬にチリチリと焼けた空気が突き抜ける。
エリスの方にも幾つか命中したはずだが、どういうわけか当たる前に消滅した。
「こういう輩（やから）がわんさかいるから注意しろ」
目の前には火の球を浮かばせている少女が立っていた。

髪は金というよりなめらかなクリーム色をしていて巫女のような袴を着ていた。
ここまでは（火の球を抜かして）普通の人間だ。
いや、まあ。白昼堂々と（時間的に表現がおかしいが）袴着ている人を見たら目を疑うが、そこはまだ許容範囲内だ。
だがつむじの左右にある三角形、解りやすく言えば狐耳がピクピク、背後ではふわふわしてそうな尾が九つ風でゆらゆら。
そいつの正体を紘の代わりにエリスが答える。

「ほぅ、妖狐のたぐいか。
しかも九尾狐とはこれまた珍しい」

関心するような興味深そうな目で少女を見た。
それに対して少女はニタアと気味が悪い笑みを浮かべた。

「そういうテメェは『３００人殺しの吸血鬼エリス』じゃねぇのか？」

「塑江霞！」

紘は眉を吊り上げて少女、塑江霞を睨み付けた。
誰がつけたかわからない呼び名を塑江霞がおもしろおかしく言っているのが許せない。
それを気にした様子もなくケタケタと笑い続ける。

「ハン、何だよ。
朝一番の幼なじみへの挨拶がそれか？」

「黙れよ！」

怒鳴って険を強くする。

「いいねぇ、ザコが粋がってくれちゃって。ゾクゾクしちまうぜ！」

ケタケタと腹を押さえて大笑いをする。

「思わず殺したくなっちまうなぁ、おい！！」

初動なしでいきなり突っ込んできた。

顎を目掛けて飛んできた蹴りを顔を横にずらしてよける。

すかさず紘は横凪の蹴りを塑江霞の腹に入れようとするが、後ろに跳ぶことで難なくよけられ”火の球”が紘を襲う。

・・・・ま、そうなるわな。

火の球を避けながら塑江霞を見る。

当たるとは初めから思っていなかった。

地面を削るように前へ出た。

相手は”火の球”による中距離攻撃と獣人特有の怪力を活かした接近戦が得意で、こちらは我が身一つ。ならば必然的に近づいていくしかない。

・・・・ここだ！

壁を壊すような思いで殴りつけ、蹴り上げる。

それを塑江霞は軽々と受け止めながら笑う。

「なんだなんだ、そのへなちょこな攻撃は。お遊戯でもやってるつもりかよ、あぁ！？」

腰に何かあるように掴もうとしたけど塑江霞の手はスカった。

「ちっ、あいつ『焔鬼』を忘れやがったな」

悪態をついて、しょうがねぇ、と塑江霞は人差し指を立ててクルクルと回す。

それに合わせで”火の球”が集まって回る。

それが段々と速度を上げてひとつの円弧となる。

・・・・あれは――――まずい！！

紘は塑江霞がやろうとしていることに気づき慌てて後ろに跳ぶ。それを愉快そうに顔を歪ませて手を広げる。

「テメェには、オレからクライマックスをプレゼントしてやるよ。そのカスみたいな手でありがたく受け取りやがれ！！」

天に掲げるようにしてから一気に振り下ろす。

それに合わせて火の輪が空気を切り裂き、焼きながら襲いかかってくる。

――――避けれな・・・・！？

紘は顔の前に手をかざしているがこんな事に意味がないのはよくわかる。

「ボサッとしてるな」

もうダメかと思った瞬間になにか強い衝撃で紘は地面を転がる。

そのすぐ横をかするようにして火の輪が通過して地面に当たって爆

発した。

「おわっ！？」

文字通り、爆音に耳をふさいだ。
至近距離で爆発したにもかかわらず紘は無傷だ。
だが、紘に某上条さん的にミラクルな右手があるわけでも、どこかの魔法先生に出てくる、何でも気合いで解決しようとする筋肉野郎ではないので、普通は、バラバラになってるはずだ。
そうなっていないのは、それなりに理由があって、目の前いる吸血鬼が守ってくれたわけだ。

「あんな輪っか遊びで立ち止まってるなよ、スライスされたいのか？」

エリスは仁王立ちで火が立ちこめる砂煙の中、塑江霞がいるであろう方向を睨みながら言い捨てる。
周りを見ると、なぜか紘たちの周りを砂煙がドーム状に避けていく。
その半円の底面に魔法陣が青く光っていた。
これが防護壁（ぼうごへき）だということは学校でも習っているが、実際に見るのは初めてだ。砂煙がかすれていき、塑江霞はそれを見た。

「おいおい、なにひとの獲物にチョッカイ出しちゃってくれてんだよ！？」

邪魔されてイライラしたのか、鋭くエリスを睨む。

「ハン、先にひとの所有物に手を出したのは貴様の方だろ」

あれ？俺って、物あつかい？

なんて紘は思ったが、悪い気はしないので何も言わない。

「まぁ、いいか。テメェを殺してからでも」

そう言ってから、塑江霞は天に向かって片手を挙げた。

『火は始まり、火は終わり、大いなる偉大な天の火よ。罪深き者に救いを』

手のひらに火が集まり、大きな炎になり、長い槍になる。

『焔火の断罪槍』

それは神々しく輝く天の火。

怒り、憎しみ、悲しみを焼き付くさんとして強まる神の慟哭(どうこく)。それがいま、エリスに解き放たれた。

空気を燃焼させてゴウゴウと唸(うな)る槍を見てまた笑う。

「まったく、封印が解かれてから退屈しない」

エリスは、ボクサーのファイティングポーズみたいに構えてからワンピースのポケットにある術式デバイスに電源を入れた。いくつかの、表示枠(サインフレーム)が現れては消えていく。

塑江霞の魔術、正確には妖術の分析をしているのだ。

「やはり、そうか」

またも、笑みを深くして何かをボソボソ呟くように言った。

何かの術式なのだと思うが、紘には判らない。

そして、いま、エリスと槍が激突した。

目を焼くほどの閃光が辺りを包み込み真昼みたいに明るくする。

「ぐがぁああ！？」

紘は光に焼かれて転げ回る。
目を焼かれ、皮がただれ落ちる。
だが、それも直ぐに治った。
紘は気付いていないが、薄く蔓のような紋様が身体を包む。

「し、死ぬほど痛てー！！」

いやいや、普通は死んでるはずなんですが。なんて、見ている人がいたらそんな事を言っていたであろう。

「アハハハ、ありゃあ死んだな。いくら不死身でも電子レベルで崩壊したら戻らないらしいからな」

塑江霞は腹を抱えて笑っている。

「そ、そんな・・・」

紘はその場で呆然と立ち尽くしてしまった。
いろいろな後悔が自分の中で渦巻く。

学校に誘っていなければ・・・・。

あの槍を自分で受けていれば・・・・。

どんなに後悔しても仕方がないことは判っているが、それでも・・・・。砂煙が晴れていくと、そこには何も無くなっていた。

そう、無くなっていたのだ。
塑江霞はそれを満足そうに見てから視線を紘に向ける。
「んじゃ、ザコ狩りでもするか。なぁ？」
肉食獣特有の餌を喰える悦びで興奮しきった目で睨まれ、膝が恐怖で揺れる。
その目が語る、「次はお前だぞ」と。
「まぁ、安心しろよ。殺しはしない」
ただ、
「精神崩壊するまで切り刻んでから死より苦痛な天国（地獄）をみせてやる」
懐から４枚の札を出してそれをばらまくように放る。
ヒラヒラと、だが、意志があるように飛び、紘を中心とした一辺が５０ＣＭの正方形になるように張り付いた。
『光に飢え、しかし、光を拒む混沌たる扉よ。新たな贄（にえ）がきた。暗黒の扉らよ、いぞや開かん』
意味の通じない言語ではないはずかなのに判らない。
自分の耳には聞こえてるはずなのに脳の方で理解することができないのだ。
これは、高度な術によくある『不可認識現象』と呼ばれているもので、術の発動に必要になる「言葉を捧げる」という行為による膨大な情報を脳が無意識に取り込もうとするが、実際にするとパンクするのでそれをしないために認識できなくしているのだ。

その『不可認識現象』による理解できない言葉がその場を支配する。
突如、張り付いていた札が垂直に浮き上がり、禍々しい光を放つ。
そして塑江霞は宣言した。

『冥府の扉』

辺りを黒い稲妻が飛来する。
そして遂に、紘の足元が裂けるように開いた。
そこは、黒より深い闇が溜まっている。
足がズブリッ、と泥沼に浸かるように沈んでいく。

「ここには甘い快楽（苦痛）に支配されてる。それに溺れられる幸運に感謝しやがれ」

腰まで沈み、それを催促するように二つの黒い手が紘を掴む。

「あ、あぁ、うぁ」

嗚咽に近い悲鳴が己の口から漏れる。
額に塑江霞の右足が乗せられた。

「テメェの声なんか聞きたかねぇんだよ。さっさと消えやがれ」

グイグイと力が込められてどんどん沈んでいく。
このままでは、自分は絶望の底に墜（お）ちてしまう。
もしかしたら、このままでもいいのかもしれない。
なんせ1人の少女を見殺しにしたんだから。
首まで浸かり始め、全てを受け入れようとする。
だが、

「おいおい、消えろなんて寂しいことを言うなよ」
紘のそばから、消えてしまったはずの少女の声がした。
そして、紘を掴んでいた手が塑江霞の足を掴む。
もう片方の手で紘を抱き抱えて這い上がってきた。

「え、エリス！」

突然すぎて、いま何が起きたのか判らない。
エリスもそれが判っているのか、塑江霞の足を横に凪払った。
ガードレール、に身体をのめり込ませて自分の型をつくる。

「あの程度の火力でこの私が消滅するはずなかろう」

塑江霞は身体を起こして背骨をゴキコキ鳴らし、鋭く睨みつけ、やがて弓にする。

「ハハ、アハハ、そうか、そうだよな。さすがは最凶の吸血鬼ってわけか。
あれぐらいじゃ無理か」

いきなり笑い出して、勝手に喋る。
それは新たな獲物を見つけた狩人（ハンター）のような獰猛（どうもう）さだ。

「ま、転校生イジメ及びクズ退治もできたからよしとするか」

「おいおい、やっとエンジンを始動させたのにおひらきはないだろ？」

「ハッ、そのうち相手してやっから、嫌と言うぐらいにな。それま

でそのザコといちゃこらしてな」
それは楽しみだ、とエリスは言って空を指差して叫ぶ。
『フォースインパクト』
すると、超高速な何かが、塑江霞にぶつかる。速すぎてよくわからなかったが、バスケットボールぐらいの隕石だとおもう。
「ま、あいさつだよ。受け取れ」
エリスはニヤッと笑う。
爆風で周囲の窓ガラスが砕ける。
だが、その中でも塑江霞は傷ひとつ付いていない。
「ビビらせんなよ。嬉しくなっちまうだろ？」
「ハンッ、スパイスを効かせすぎてテメェのマゾ本能に火を付けたか」
お互いに高笑いし合っているのを見てダラダラと汗を流す紘。
すみません、ふたりの会話についていけない。
笑っていた塑江霞がちらりと腕時計を見ると、あちゃー、と額に手を添える。
「なんだ、もう時間かよ。この身体は制限があるのがいけねぇ。それじゃ、オレは引っ込むっか」
渋々といった表情で懐から小さな葉っぱを取り出して口にくわえた。
すると、光が溢れてきて全身を包む。

鋭い爪が丸みをおびて、狐耳は引っ込み、髪の毛が黒くなる。
光が退いていくと、懐から今度は眼鏡を取り出して装着。

「紗幸（さゆき）、おはよ」

紘が塑江霞だった人物をそう呼んだ。
すると、急にオドオドし始めて、頬を真っ赤にする。

「ひ、紘くん。おはよう・・・・ございます」

はにかみながらも、笑って、あいさつを返した。
この一見、口べたな文化系少女こそ、あの身体の持ち主、柿村紗幸（かきむら・さゆき）なのだ。

「あの、すみません。塑江霞さんがまた悪さをしましたよね？」

ペコペコかなりの勢いで頭を下げている。
エリスはそれをポカーンとした顔で見ていた。

「おい、ヒロ。なんだあれは？」

たぶん、紗幸が、普通の人間が塑江霞、妖狐に取り憑かれているかの問だろう。

「よく判らないが、昔から紗幸にはアイツが憑いていたんだ」

初めて合った時にはもう、塑江霞と紗幸は一緒だった。
しかし、一族が全員がそういう家系かというと、そうではない。
一般的な平々凡々の人間の一族だ。

「半妖(はんよう)とはまた違った種類のものだな。これまた珍しい」

ジロジロと遠慮なくエリスは紗幸を観察する。
紗幸は身体を強張らせて怯えきった表情で紘に無言の助けを求めている。

「エリス、いきなりそんなことされてるから紗幸が怯えてるだろ。やめとけ」

「あ、あぁ」

名残惜しそうな顔をして紗幸から離れた。

「それより、なんで塑江霞は俺たちを襲ったんだ？」

「そ、それは・・・・紘くんが・・・・」

あれ？俺が何かしたのか？
紘は、そんな風に首を傾げる。

「俺がどうかしたのか？」

なんだか言いにくそうに俯いているが、やがて口を開いた。

「知らない女の子と歩いていたから・・・・」

その子は誰なの？と目で訴えてきた。
やっぱり訊(き)いてくるか・・・・。
これに対しての反応は最初から決めてあった。

「こいつは、エリスだ。親父(クズ)の知り合いの娘で、今日から俺たちの学校に通うことになった」

紹介されたエリスは不満があるのか、ムスッとしていた。

「そう・・・・なんだ」

理解したが、納得はしていないようだ。

誰もいない薄暗闇のなかを誤魔化すように少し早めに歩いた。

歩けば狐！？（後書き）

塑江霞は、某「お稲荷さま」をイメージしてます。
性格は違いますが。

編入試験は死に物狂い！？（前書き）

友達にこの前、この小説を読ませたら設定が甘いと言われました。

編入試験は死に物狂い！？

俺たちの通う学校は近衛学園という国立の学校で、小中高が繋(つな)がっている。

普通の人間から、亜人、悪魔、精霊など、さまざまな生徒が通っている。

学科は、『経済学科』『看護学科』『技能学科』があり、『技能学科』には『体術コース』『銃術コース』その他に多数のコースに分かれている。

校訓は『意志を通したければ力を示せ』と、あるように、自分の力が直接成績に反映される。

なので、月に一度は、自分の能力別に試験があるのだ。

そして、編入試験には『普通試験』の他に『能力試験』がある。

紘とエリスは、紗幸と別れたあとに、園長室へと向かった。

エリスに『能力試験』を受けさせる為にだ。ノックをしてから返事を待たずに入る。

そこには、綺麗な灰色に近い白にかんざしを刺した髪の美女が座っていた。

どこか、のほほぉーんとしていて掴み所がない人だ。

だが、当然ながら教師などではなく、この部屋の主、近衛刀子(このえ・とうこ)学園長さまだ。

見た目は若いのだが、長寿族だからエリス同様にかなりの歳らしいが、詳しくは不明。

そもそも、このお方に歳を聞くような事をしたら、その瞬間にそいつは塵（ちり）と化す。
なんせ、トップクラスの戦闘力を持つ『戦闘狂（バーサーカー）』の家系だからだ。
この見た目からは、とても想像できないが、この前の新入生歓迎会では１００Ｍ先の鋼板（厚さ１５ＣＭ）を笑顔で真っ二つにしていた。
その強さを感じたのか、エリスの手はワンピースの右ポケット（術式デバイス）に延びていた。
そんな彼女の前で、当然ながら紘はガチガチになっていた。
そんな彼を見て刀子は優しく微笑む。

「あらあら、紘さん。そんなに固くならなくてもよろしいのに」

その言葉は紘をほんわかさせるが、緊張はまだとれない。

「は、はひぃ！」

ふふっ、と笑って向かいの椅子に座るように促した。
それに従って、腰を降ろすと、イスは結構フカフカだった。

「はい、では、そちらの方がリアちゃんが言っていた入学の希望者ですか・・・・」

「あ、はいそうです」

刀子が言う、リアというのは、紘の母親の愛称だ。
ほら、挨拶！というようにエリスの肩をつついたが、すごく仏頂面で刀子を睨んでいる。

「おい、私の身体に巻き付いた鬱陶（うっとう）しい”コレ”はなんだ？」

「は？」

何をいきなり言い出すのかとエリスを見ると彼女の身体のいたる所に青白い糸が絡み付いていた。

「なんだよこれ！？」

紘は、糸を掴んで引っ張る。
しかし、ゴムのような伸縮性があるのに千切れない。
一方、刀子は笑顔を絶やさずに口を開いた。

「いえ、ただ私も親御さんからお子様を預かる身なので”招かれざる者”をおいそれと侵入させるわけにはいかないもので」

するとエリスは、冷ややかな表情を浮かべて嘲笑した。

「クハハ、”招かれざる者”、ねぇ・・・・。
それなら－－－－」

エリスの姿が消えてしまった。
否、実際に消えてしまったわけではない。速すぎて脳の反応速度が追いつかない故に、そう見えただけだ。
エリスは刀子の背後に回り込みながら術式デバイスを操作する。すると突然、右手が赤く光り出して陽炎（かげろう）を浮かび上がらせた。
完全に背後につくと、脚に衝撃吸収の魔法陣が展開する。それによってエリスはスリップすることなく、かつ怪我することなく止まることが出来るのだ。
さっきより輝く強さを増した右手を振りかぶった。

「ーーーーこんなことをされても文句は言えんだろ？」
振り抜いた瞬間に爆発して刀子の身体が弾(はじ)け飛ぶ。
「ふぅ」
部屋中を砂と血の混ざった粉塵(ふんじん)が埋め尽くした。
「お、おい、エリス！なにやってんだよ！？」
なぜエリスがあんなことをしたのか解らない紘は刀子がいた場所を見た。
そこらじゅうに肉片が飛び散って鉄臭さが充満している。
エリスはそれに答えず、窓を見てから、紘の手を掴んで飛び出す。
「う、うあぁぁぁああ！？」
紘は叫び声にドップラー効果を効(き)かせながら宙を舞う。

肉片が飛び散る室内にひとりの女が立っていた。
鋭い目つきをして、目の下から顎にかけて傷の跡があった。
名を志乃(しの)と言い、刀子の補佐をしている。
「まさか、『戒めの糸』を素手で切り落とすとは・・・・」
言葉とは別に抑揚の無い声音で床を見た。
そこには、エリスを縛り付けていた青白い糸、『戒めの糸』が千切れ落ちている。

本来ならば、これに縛られると身動きが出来ないはずだ。
だが、何ともないように歩いて、しかも術式も使わないで切るなんて感嘆を通り越して呆れる。
床にあるソレに触ると、瞬く間に粉状になって風に舞ってしまった。
「さすが、『破壊者（ブレイカー）』と呼ばれるだけはありますね・・・・」
志乃は背後に突然人の気配を感じたが、振り向かない。
「あら？彼女は、そんな名で呼ばれているの？」
のほほぉーんとした調子の声の主、”刀子”は首を傾げた。
それを見た志乃は心の中で眉を訝しんだ。
（まったく、この人は・・・・。
早朝にいきなり「豚肉を買ってこい」と言われて何かと思えば、肉で自分のレプリカを造って操るとは）
そうなのだ。
刀子はわざわざ志乃に大量の豚肉を買いにいかせて、魔術で自分そっくりの人形を造ったのだ。しゃがんで、自分そっくりのレプリカの肉片をこねくり回していた刀子は、顔を上げて微笑む。
「やあねぇ、そんな嫌そうな顔をしないでよ。ちょっとした遊び心じゃない」
「刀子様、相変わらず破綻した性格をしていますね」
ふざけた調子の刀子をバッサリと斬り捨てる。
だが、刀子は顔を赤らめながら胸を押さえてグッ、と親指を立てた。

「ハアハア・・・・グッドよ！志乃。とってもベリーグッドよ！！」
爽やかな笑みを浮かべてカモン系のジェスチャーをしている変態を無視して話を戻す。
「呼び名の発端はいろいろあります。
エリスは中世、魔女狩りが始まる頃から盛んに行動し始めました」
「発情期！？発情期なのね！」と騒いでいるが、反応すると喜ぶから放置する。
「その時に、発生したのが・・・・これです――――」
備え付けのパソコンからファイルを開く。
そこには・・・・
「『聖ジョージ大聖堂、一夜で崩壊』？これって確か・・・・」
いきなり刀子は、真剣な顔になって首を傾げる。
新聞の切り抜きであろう。炎に包まれた写真と共に被害状況などが大まかに書かれていた。
「はい、一般的にはテロ組織によるものだと言われていますが、彼女がしたことです」
ですが
「これを知っているのは裏の人間だけです。
なので、後に起きた『３００人殺しのエリス』などという通り名が

広まりました。まだまだ調べれば山ほどこういった事件が出てきますよ」

襲撃された場所の惨状などから裏の人々は『破壊者』と呼ぶようになる。

刀子は志乃の話を頷きながら聞いていると、いきなり手を挙げた。

「せんせー、エリスさんは一度封印されたはずですよねぇ？」

「誰が先生ですか！

まあ、データによればそのはずですが見事に解けてますね」

当時は政府で暗殺部隊などを創設していたが、まったく役に立たなかった。

だが、１３５０年前にエリスの封印をやっと成功させた。

なんと、それは一般人が成し遂げたのだ。

それにはお偉いさんもびっくりしていた。しかし、封印が劣化したのか、誰かが封印を解いたのかは判らないがしがらみもなく動いていた。

「私にも判りませんが、封印が解かれているのは確かです」

お偉いさんには知られてないでしょうが、と付け加えて窓を見る。

もし、知られたらとんでもない事になります。

あの青空は殲滅部隊などで真っ黒ですね。

「それより、刀子様。本当に、彼女たちにアレをするのですか？」

窓から刀子に視線を戻す。

すると、刀子は志乃に、ニヤリと口の端を持ち上げた表情を見せる。

「当然じゃない」
いたずらを思い付いた子供のような笑顔を向けてくる。
辞職しようかな、と志乃は本気で考えた。

「・・・・・・・・という訳だから、私が吹っ飛ばしたのはレプリカだ」
日光を避けるように校舎の陰を走りながらエリスの話を聞いて紘は、ガクリと肩を落とす。
「それならそうと言ってくれよ。あまりのショックで死にそうだ」
ほっとする反面、あの人がそう簡単に死なないと改めて感じた。
「そういえば――――」
しばらく走っているとエリスは、唐突に切り出した。
「あの女に「面白い事をするので楽しみにしていてください」と言われたが、ヒロ、あれは何の事か判るか？」
「さあ？判らん」
判らないが、なぜか紘は、ものすごく嫌な予感がしていた。
それは的中することになる。耳をつんざくように警報が鳴り響いた。

反射的に反応した紘はスピーカーを睨む。

「おいおい、何でこんな時に警報がなるんだよ！？」

紘の問に答えるように放送が流れる。

『校舎内に不審人物が侵入してきました。先生方は直ちに持ち場について下さい。
尚、その侵入者は高等部１年の須川紘さんと共に行動している模様です。
日頃の怨みを晴らすために、徹底的に始末するようにお願いします』

後半は思いっきり私情が入っていた。

「だとよ、どうする？」

「とんだ、熱き友情たなぁ～おい！」

男泣きをしながら全力で走り、光の線が背後に流れた。

校舎と校舎の間をひたすらに走り続けると足元で、何かが切れた。

「やば！！」

咄嗟に立ち止まってから後ろのエリスを、タックルするように抱きかかえてその場を離れる。
すると、紘が立っていた場所から剣が突き出される。
振り返るように回転しながら止まると、地面から西洋の鎧にゴテゴ

テと鉄板をくっつけたようなもの、機動兵士が湧き出てくる。
戦闘用のＡＩが搭載されており、強固な装甲が特徴。
そのゴツゴツとした手には、黒の巨大なフォルムをした・・・・。

「Ｍ１３４ガトリング機関銃だと！？」

それは、７．６２ミリ口径の六銃身ガトリング式機関銃で、毎秒五十発以上のペースで撃つ化け物だ。
紘は驚愕の声を挙げて回れ右をして逃げると同時に、一斉に火を吹いた。
それを抱えられながら見ていたエリスは、紘の腕の中から飛び降りて鉛の雨に両手を翳した。

「熱いのは好きじゃないんでね」

手のひらを中心として淡い赤の幕が展開されると同時に弾が接触する。

「跳弾（ちょうだん）って知ってるか？」

若干のタイムラグの後に全ての弾が跳ね返り銃口に向かってきれいに吸い込まれて中規模な爆発を幾つか、つくる。
ただ跳ね返るだけではこうはならない。当たる場所と向きを計算して別々に幕の形を変化させていたのだ。
しかも加速の術式のおまけ付きだ。
それを見ながら満足そうに頷く。

「即興（そっきょう）だったから大したことはないと思ったが、そうではなかったな」

幾つか表示枠（サインフレーム）を展開させて文字盤（キーボード）で操作する。
その間に砂塵が薄れていき、機動兵士が突撃してくる。脚に付いたモーターの駆動音と人工筋肉が軋む音をさせながら手の甲から突き出す剣を横凪に振るわせる。
それを後ろに少し下がるだけで避ける。
目の前を通り過ぎると同時にボディに拳を叩き込んだ。
魔力を込めて音速まで速（はや）くした拳は弾丸のように装甲を貫通させた。

「な！あ、あの機動兵士を一撃で！？」

紘は、驚愕すると同時に目の前にいる機動兵士の頭を蹴りで粉砕する。
ぐらりと傾く機動兵士に飛びついて頭があった場所に手を突っ込んだ。
その間に機動兵士は乗っかっている邪魔者をどかそうと手を動かした。

「おわぁっ！」

慌てて紘はコードを引きずり出して後ろに跳ぶ。
すれ違いに機動兵士の手が掠めて冷や汗をかく。
紘を掴み損ねたが、代わりに自身のコードを掴んで引きちぎった。
ブウゥン、という気が抜けるような音をさせて前のめりに倒れる。

「ふぅっ、所詮は機械、か。闘うだけの薄っぺらい知能しかなかったのな」

ひと息ついてから機動兵士が出てきた場所を見るが、他に出てくる気配は無い。

「そうだ！エリスは・・・・・・・・・って、げげ！？」

視線をゆっくりスクロールさせた先には、５体の機動兵士が平積みにされて、その頂点にコンパクトサイズの金髪少女があぐらをかいて座っていた。

「なんだか、歯ごたえのない連中で困る。雷撃ひとつで全員ショートとは・・・・」

そう、エリスは、紘が１体を倒している間に、５体も地に沈めたのだ。

「なんつーでたらめな」

開いた口が閉まらないとはこの事だと確信する。

周りが静けさを取り戻したのも束の間、機動兵士が出てきた穴の両サイドが開き、片方から黒龍が巨体を揺らしながら出てきた。

「ハッハッハ、どうやら貴殿らには機動兵士などでは甘すぎたようじゃな」

豪快に笑って鋭い牙を光らせる。

「どうじゃ？ワシと少し遊んでみてはくれんかのぉ？」

黒龍は右手を上げると、自身が出てきた穴とは違う方から装甲パーツが飛び出してきた。

宙を舞ながら、手、脚、胴体、翼と、それぞれ移動してボルトで留められて、そして最後に頭部が包まれた。

「事務員、アブソード・グリーダ参る！」

装甲に覆われた両翼を広げて腰を落として構える。
前進のために羽ばたいて飛ぶようにしかし浮かずに翔る。アブソードが通った場所に突風が駆け抜けて校舎のガラスを砕く。
その中、綺麗な音が聞こえてくる。

『水のように、風のようにすべてを包み、そして呑み込むがいい』

エリスは唄うように、舞うように唱える。

『神風水陣っ！！』

風が水を伴いながら竜巻のように吹き荒びアブソードを呑み込まんとする。

「うおぉー！」

だが、アブソードは巨体を器用に操って風と水の隙間を難なく突き抜ける。

「龍にとってはこのくらいのそよ風ごとき屁でもないわい」

拳を鉄砲のように振り抜いてぶつける。

「突衝拳っ」

固い物同士がぶつかる音が響くが、エリスに拳は届いていない。
当たる寸前に防護障壁を展開したからだ。
だが、

「甘いわ！！」

留めたはずの拳が震えてなぜか、防護障壁の内側で衝撃波が生まれた。

「ぐがぁっ！？」

エリスは衝撃に耐えきれずに壁に激突して穴をあけた。

「ワシの拳は防御などでは対象できんよ」

カッカッカー、と高笑いを響かせた。

瓦礫から立ち上がったエリスは術式デバイスを操作していく。

「えらく余裕そうじゃな？」

拳だいの石を投げつけながら挑発する。

それを見もしないで軽々と避けていく。

「実際に、余裕だからな」

操作を終えて、ニヤリと笑った。

「さぁ、老体。年寄り同士血みどろになるぐらい仲良くしようじゃないか！！」

紘は、暗い道に座り込んでいる。
ジメジメとしている地下道のようだ。
今、隣にはエリスはいない。
アブソードが出てきたのを見た後に、なぜか足元が落ちたのだ。

「なんだよまったく」

しかも、誰の仕業か知らないが、落ちた所は無数の剣がつきだしていた。
お陰で穴だらけになってしまった。

「ん～、とりあえず進むか？」

明かりも何も無い暗闇でも紘にはシミひとつにいたるまですべてハッキリくっきり見えている。

「なあ？」

そう、後ろに呼びかけた。
そこにはさっきまで自分が刺さっていた剣があるだけなのだ。
だが、その剣の山が、床ごと盛り上がった。
それは、アルマジロにトゲトゲをつけたような姿の”ソドラス”という魔獣だと授業で習った。

「この学園ではこんな可愛らしいペットまで飼っているのか」呆れて手で顔を覆う。

「こんな成(な)りで大人しい・・・・」

「グガァオオー！！」

「なんて展開はないのね」

壁を震わせるほどの咆哮（ほうこう）に身体の芯まで響いた。

床にはドロドロの唾液を撒き散らして獲物を見つけて興奮しきっている。

「躾（しつけ）のなってないペットには調教が必要だよなぁ、えぇ？」

その言葉が火蓋となって二つの影は動き出した。

編入試験は死に物狂い！？（後書き）

勢いで書いていると話の前後で違う内容になってしまったりして慌てます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9990o/

ゾンビとアイツ

2011年10月8日08時34分発行